

別紙 1

平成 24 年度 アイヌ民族文化研究センター運営協議会会議録

1 日時

平成 25 年 3 月 5 日 (火) 13:30～15:40

2 場所

アイヌ民族文化研究センター会議室

3 出席者

(1) 委員 (職名等)

委員 大島 直行 (伊達市噴火湾文化研究所所長)
委員 荻原 眞子 (千葉大学名誉教授)
委員 加藤 忠 (社団法人北海道アイヌ協会理事長)
委員 加藤 町子 (社団法人北海道アイヌ協会札幌支部会員)
委員 熊谷 カネ (社団法人北海道アイヌ協会様似支部理事)
委員 澤田 一憲 (社団法人北海道アイヌ協会理事)
委員 津曲 敏郎 (北海道大学大学院文学研究科教授)
委員 吉田 真弓 (帯広市図書館館長)

(2) 研究センター職員 (職・氏名)

所長 中村 亘
副所長 須貝 行一
研究主幹 古原 敏弘
総務課長 村上 誠一
研究課長 小川 正人
研究職員 甲地 利恵

4 議題

- (1) 委員長、副委員長の選出
- (2) 平成 23 年度事業実施結果について
- (3) 平成 24 年度事業実施状況について
- (4) 北海道博物館計画について
- (5) 次期事業推進方針の策定について
- (6) 意見交換・情報交換

5 配布資料

- (1) 資料 1 平成 24 年度アイヌ民族文化研究センター運営協議会委員名簿
- (2) 資料 2 アイヌ民族文化研究センター運営協議会設置要綱
- (3) 資料 3 年報 2011 (平成 23 年度)
- (4) 資料 4 平成 24 年度事業実施状況

- (5) 資料5 研究センター予算
- (6) 資料6 北海道博物館計画に関する検討状況等
- (7) 資料7 北海道博物館実施計画の概要
- (8) 資料8 次期事業推進方針（平成26～30年度）（骨子）

6 協議経過

- (1) 委員長及び副委員長の選出
- (2) 平成23年度事業実施結果についての説明と質疑応答
- (3) 平成24年度事業実施状況についての説明と質疑応答
- (4) 北海道博物館計画についての説明と質疑応答
- (5) 次期事業推進方針についての説明と質疑応答
- (6) その他（意見交換等）

7 協議の内容（要旨）

- (1) 委員長及び副委員長の選出

委員長に加藤忠委員、副委員長に津曲敏郎委員を選出した。

- (2) 平成23年度事業実施結果について

《質疑応答1》

委員：久保寺逸彦文庫の音声・映像資料について「宗教儀礼等を録音したレコード」とあるが、この「宗教儀礼」とはカムイノミのことをいうのか。

事務局：同文庫の音声・映像資料として、熊送りの映像を記録したものがある。また、儀礼についての聴き取り調査が記録されている。

委員：「宗教」といって一般にイメージされるものとは違うのではないか。

事務局：広い意味での「宗教」ということで用いた。

委員：研究者によって語の使い方は異なっているようだ。かなり広い意味にとって「宗教」を用いることもあれば、「呪術」「宗教儀礼」「信仰儀礼」などを用いる人もいる。

《質疑応答2・4》

委員：久保寺文庫のレコード盤の写真が年報に掲載されているがこれは市販されたのか。

事務局：これは近年のレコード盤のように音声をプレスして販売ルートに乗ったものではなく録音用の原盤である。久保寺氏は自らレコード盤への録音機を携えて現地調査を行った。この当時の録音メディアはアルマイト製やアルミ製のレコード盤であった。記録用のメディアとしてのレコード盤は市販されていた。

委員：その原盤はここ（緑苑ビル庁舎）にあるのか？

事務局：山田文庫・久保寺文庫の原資料は、現在は別の場所に保管している。

委員：原盤を再生して聴くことは可能か。

事務局：かなり劣化が進んでいるので原盤の再生は難しい。ただ、久保寺文庫のレコード盤録音（戦前の調査）は比較的早い時期にオープンリールテープに複写され北海道立図書館に収められたので、内容は確認できる。

《質疑応答 3》

委員：アイヌ口承文芸等について録音を行ったのは久保寺氏が最初なのか。

事務局：ピウスツキ（ピルスツキ）の蠟管録音が、知られている限り最も古い録音である（1900年頃）。日本人による録音としては、田辺尚雄による録音（1923年）、北里闌による録音（1931年）など。ただし、これだけまとまった量でアイヌ語の口承文芸や歌謡を記録を行ったという点では、久保寺氏が最初（1934～1935年）であるといえる。

（3）平成24年度事業実施状況について

《質疑応答 2》

委員：資料4-5にあるアイヌ民俗文化財専門職員等研修会（教育庁主催）での「アイヌ文化財の保存活用～地域の実情を生かす取組み」の内容はどのようなものであったのか。

事務局：このタイトルは研修会全体のテーマとして主催者側が設定したものである。当センター職員が担当した講義内容は、このテーマを踏まえつつ、日頃有形文化財に接することが多いと思われる受講者に対し、アイヌ音楽という無形の文化財に接するときに留意すべきことがらに言及しながら、アイヌ音楽の特徴について概説した、というものであった。

《質疑応答 3》

委員：充実した企画展等が行われているようだが、どのように広報し、広く道民に知らせたかなどどのような効果があったのか。

事務局：効果について測ることは難しいが、たとえば当センターによる企画展関連事業の講演会にはたくさんの参加者があり、開催先の担当者からも「いつもはこんなに人は集まらない」「普段の利用者や参加者とは違った顔ぶれが多い」と言われることが多い。当センターの企画展は、なるべく開催先の地元周辺に関連するテーマと資料で展示を行うようにしているので、その点で関心を高めているともいえる。

委員：素晴らしい内容であるので、もっと広い範囲に広報されることが望ましい。広報のあり方についても工夫してほしい。

《質疑応答 4》

委員：企画展や講演会等の日程は、決まった時点で運営委員に通知してほしいと思う。

事務局：委員の皆さんにはチラシをお送りしているが、より確実に周知されるようにして参りたい。

《質疑応答 6》

委員：資料3の4ページにある「排架」は「配架」ではないのか。

委員：図書館用語では「排架」である。ただ配るのではなく、櫛の歯のようにきちんと整頓して置く、という意味で「排架」と書く。

委員：専門用語では一般には分からないのでは。

事務局：一般の人にも分かる言葉を使うよう心掛けて参りたい。

(4) 北海道博物館実施計画について

《質疑応答 1》

委員：北海道博物館実施計画において「アイヌ文化の調査研究機能等の充実」が掲げられているが、具体的にはこのセンターの名称は残されるのか。

事務局：それも含めてまだ検討の段階である。

委員：センターの名称を北海道博物館の組織内に残すということについては絶対に譲らないでほしい。というのは、アイヌ文化についての専門研究機関は、国内的、国際的にみても現在このセンターが唯一であり、長年にわたる実績をふまえても、この研究機関の名称、機能、ともに残されないというなら「北海道博物館」の意義が見出せないからである。このことはこの運営委員会の強い意見要望として主張して行ってほしい。

《質疑応答 2》

委員：アイヌ民族文化研究センターをきちんと残すという部分がなくなるとは、北海道博物館計画が、これまでの道立の博物館と何ら変わった点が見いだせない。このセンターがきちんと看板を掲げることによって、道民も「今までの博物館とは違う」という印象をもち、予算をかけることに理解を示すものであると思う。

事務局：(質疑応答 1、2 を踏まえ) これまでの委員皆様のご意見、お気持ちを重く受け止めて対応して参りたい。

《質疑応答 3》

委員：(資料 6、7 に関し) 北海道博物館構想全体が「内向き」な印象を受ける。自分たちの設備と中身を新しくすることについては具体的だが、国際社会の中で北海道の博物館というものをどのように位置づけ、どうあるべきかがどこにも謳われていないというのは、何を考えているのか分からない。この点が肝心であると思うのだが。

《質疑応答 4》

委員：アイヌ民族文化研究センターを残すことに加え、充実したサテライトを作ることがを要望したい。サテライトについてはもっと重視すべきである。これまでのように、郊外に大きな建物を作って「ここに来てください」といっても、現実には人は来なくなっている時代であることを認識しなくてはならない。現在の赤れんが庁舎にある資料室の延長で北海道博物館のサテライトを考えているのではよろしくないと思う。駅前など、人の多く集まる場所にサテライトを作り、そこの訪問者が郊外の本館へ行ってみたいくなるような機能と内容が考えられるべきである。とくに札幌市は国内外からの観光客も多いので、対応可能な職員の常駐を前提としたシステムづくりが望ましい。

《質疑応答 5》

委員：この実施計画とは別のことがらかもしれないが、「博物館で働く人材の育成」の対象に、現在アイヌ文化について専門的に学んでいるアイヌの若者になるべく多く含まれるようにしてほしい。

(5) 次期事業推進方針について

《質疑応答 1》

委員：「道によるアイヌ文化の専門機関として」とあるが、道だけでなく国内的にも世界的にも唯一の機関であることを認識して、そのように書かれた方がよいと思う。また、センターの自主性、機能、これまでの実績を踏まえて、博物館に統合されることによってセンターの機能や研究そのものが一層促進される方向が目指されなければならない。それが統合によって弱められるようでは意味がない。

《質疑応答 2》

委員：次期推進方針の内容がよいだけに、現在の道立の博物館の組織体制の枠組みに収まらないように思われる。枠組みに押し込めるのではなく、記念館にはいくつかの課があるが一つの課に押し込めることは認められないし、この推進方針がきちんと遂行されるためにも、センターの独立性を確保することが必要であると思う。具体的に北海道博物館計画における組織体制等は決まっているのか。

事務局：具体的な検討はこれからである。組織のあり方などについて、平成 21 年度からご意見をいただいておりますので、委員の皆さんの意見をしっかりと受け止め主張して参りたい。

委員：他の都道府県にも、研究機関の独立性を残しながら博物館と統合している例は見られる。かえってそれが新博物館の特徴となっており、センターとしてもそれくらいの気概を持って当たっていただきたい。

《質疑応答 3》

委員：議題 (5) の資料 6 に戻るが、「実施設計」とは発注のことか、仕上がりを意味しているのか。

事務局：建物の老朽更新など改修の部分について「実施設計」と言っている。

委員：計画はもっと早い時期から委員にも周知されるべきである。

(6) その他（意見交換等）

委員：資料 7 にある「教育普及の充実」に書かれた「学習プログラムの開発と活用」とは、アイヌ語の学習のことをいうのか。

事務局：博物館全体の分野についてのことである。もちろん、その中の一つとしてアイヌ語の学習が含まれてもおかしくはない。

委員：ぜひアイヌ語も含めていただきたい。